

# 学校レクリエーションの研究

## — その内容と推移について —

田 中 一 行 (兵庫県立西宮今津高等学校)

学校レクリエーション レクリエーション教育

### 目的

「学校レクリエーションとは何か?」という大テーマのもと、「学校レクリエーションの内容はどう変化し、どう推移してきたのか?」について、「学校レクリエーション」「レクリエーション教育」「学校におけるレクリエーション」という言葉に着目し、その内容と変化を追った研究である。「学校レクリエーション」という言葉を使って、述べられている理論、及び、実践事例を整理し、今後の「学校レクリエーション」の方向性をさぐるのが本研究のねらいである。

### 方法

次の資料を中心とした、文献研究である。

- (財)日本レクリエーション協会発行 月刊誌『レクリエーション』  
 全国高等学校長協会、全日本中学校長会著『中等学校に於けるガイダンス  
 としてのレクリエーションの計画と指導』(1951.7東洋館出版社)  
 全国学校レクを考える会編『学校レク最先端』

1 (1985.3) 2 (1986.5) 3 (1987.7) 等

### 結果と考察

理論と実践活動から、時期別に次のように区分して見ることができた。

- 1 流入期 ( ) ~1964)
- 2 分化期 (1965~1974)
- 3 ゆとり期 (1975~1981)
- 4 遊び化期 (1982~ )

「流入期」は、余暇を善用するために必要な知識・技能・態度を身に付けるという「レクリエーション教育」の考えが流入した時期である。この時期の『学習指導要領』には、「レクリエーション」という言葉が多く用いられたが、現場の教師にその方法論が根付かず、世の中も余暇のための教育の必要性をそれほど認めなかった。

「分化期」に入ると、(財)日本レクリエーション協会により「全国学校レクリエーション指導者講習会」が開催され、初めて「学校レクリエーション」という言葉が用いられた。また、「全国レクリエーション大会」では、盛んに「レクリエーション教育」「学校レクリエーション」について議論が戦わされるようになり、「目的論」「手段論」に代表される理論の分化が現れてきた。

「ゆとり期」は、1976年に教育課程審議会から「ゆとりと充実」をうたった答申が出さ

れた。その前後に、「ゆとりの教育＝学校レクリエーション」という議論と実践が、盛んに行われた時期である。この頃には「レクリエーション教育」という言葉より「学校レクリエーション」という言葉が主流になり、「将来の余暇の善用に備えた教育」という観点より、「現実の学校教育の中の余暇時間を善用する教育」という観点が中心となった。さらに、余暇時間の問題だけが「学校レクリエーション」ではなく、授業をはじめ、教育そのものを「学校レクリエーション」とする考えも現れてきた。また、講習会を開催するための学校レクリエーション研究会が、地方にできはじめたのもこの時期である。

「遊び化期」は、「ゆとりの教育＝学校レクリエーション」では現場に根付かず、それに変わり「遊び」「おもしろい」をキーワードに「学校レクリエーション」を進める動きが現れてきた時期である。「遊び」によって子どもの自主性・創造性を引き出し、授業をはじめ学校そのものを楽しい場にしようという取り組みである。「遊び」というキーワードの裏には、「学校レクリエーション」によって、今の学校教育が抱えている問題点を改善・改革しようという意図が読み取れるのである。また、研究会活動も各地で盛んに行われるようになり、「全国学校レクネットワーク」という全国組織もできている。

「学校レクリエーション」の実践内容は、教育目標との関係で、段階的に次のように分類できた。

- 1 無意図的な教育としての段階 (教育≠レクリエーション)
- 2 意図的な教育としての段階 (教育>レクリエーション)
- 3 レクリエーション的な教育としての段階 (教育＝レクリエーション)
- 4 今の学校教育の目的以上の段階 (教育<レクリエーション)

「無意図的な教育としての段階」は、緊張状態の中の弛緩作用である。無意味なものではないが、指導の仕方が押付けのであったり、子ども不在のものであったりすると、レクリエーションに対する嫌悪間を与えるだけで、逆効果である。

「意図的な教育としての段階」は、レク財を利用することによって、楽しくないものを楽しく変えるところに意義がある。しかし、この段階ではまだ、与えられるのを待つという子どもの姿勢である。

「レクリエーション的な教育としての段階」では、子ども達は自発的に取り組み、楽しい雰囲気の中で高まっていく。しかし、レクの自立という段階ではなく、目標は教師のもので、子ども自身のものに成り切っていない。

「今の学校教育の目的以上の段階」には、ふたつのプロセスがあった。ひとつは、段階的に指導することにより、目標を超えるものである。いまひとつは、学校が従来持っている枠をはずすという取り組みである。このためには、子どもにも教師にも、自由と創造の空間が保障されなければならない。

## まとめと課題

学校レクリエーションは、楽しい雰囲気の中で自主性・創造性を、保障し・導き出す指導論にこそ、その独自性がある。また、現在に至るまで「レクリエーション運動としての学校レクリエーション」と、「教育運動としての学校レクリエーション」を混同してしまっていた。この部分を整理し、学校レクリエーションの独自性のプロセスを確立することが、今後の発展につながるものと確信する。